

リレー随筆

もっと知ってほしい！ジブリ作品の魅力！

鹿児島大学病院 研修医1年 徳重 沙樹

はじめに

今回リレー随筆を担当させていただきます
鹿児島大学病院研修医1年目の徳重沙樹と申します。同期の研修医に今回の執筆を持ちかけられた時は「ジブリについてなら書けるかな」と軽い気持ちでOKしてしまいましたが、過去の先生方の素晴らしい随筆を拝読し、受けるんじゃないかと後悔しながら原稿を書いております。案の定まとまりのない文章になってしまいましたが、自分なりに一生懸命書きましたので温かい目で読んでいただければ幸いです。

ジブリ好きの母の影響で、物心ついた頃からジブリ映画を観て育ってきました。ほぼ全ての作品のDVDとBlu-rayをもっており、月3～4本はジブリ映画を観ます。(今も『もののけ姫』を見ながらこの原稿を書いています。が、全く原稿に集中できないであります。) 特技はジブリ映画のアフレコ。できたところ

でなんの役にも立ちませんが、自分の中では割と鉄板の自慢の特技なのです。「ジブリ作品のどれが1番好き？」とよく聞かれますがなかなか答えられません。だってどれも大好きなんでしょう！

学生時代には、友人と一緒に、『もののけ姫』のモデルになった屋久島の白谷雲水峡へトレッキングに行きました。青春18切符を使って東京 静岡 愛知のジブリゆかりの地を巡る一人旅（オタクな旅に友人を付き合わせるのはちょっと申し訳なかったの）をしたこともあります。このご時世、コロナのせいでなかなか旅行にもいきませんが、落ち着いたらまた全国のジブリゆかりの地を巡る旅をしたいものです。

いろんな視点で楽しめるジブリ作品

小さい頃はジブリ映画のファンタジー性や、独特の世界観が好きでした。もちろん今でも



屋久島白谷雲水峡トレッキング



愛地球博・モリコロパークにある
「サツキとメイの家」

それは変わりませんが、年を重ねるにつれ、別の視点からもジブリ作品を楽しむことができるようになった気がします。

例えば『魔女の宅急便』。「13歳になったら、魔女の修行のために他所の町に移り住み、独り立ちをする」というしきたりに従い旅立った魔女のキキが、初めての一人暮らしや仕事をする中で、挫折を経験しながら成長していく姿が描かれています。自分も社会人1年目で、最近一人暮らしを始めたばかり。キキと重なる部分が多く、考えさせられるシーンがたくさんあります。

例えばこのシーン。あるおばあさんが孫の誕生日に作ったニシンのパイを、キキは突然の雨でずぶ濡れになりながらも孫に届けにいきます。しかし、いざ孫に手渡すと、「おばあちゃんからまたニシンのパイが届いたの。だから要らないって言ったのよ。アタシこのパイ嫌いなよね。」と冷たい言葉。キキは落ち込み、これを機にスランプに陥ります。これをみて昔は「なんて性格の悪い孫だ！」とムカついたものですが、宮崎駿監督はこのシーンについてインタビューでこう話しています。「宅急便の仕事をするというのは、あ

あいうこと。キキはあそこで自分の甘さを思い知らされたんです。当然、感謝してくれるだろうと思い込んでいたのが…。違うんですよ。お金をもらったから運ばなきゃいけないんです。もし、そこでいい人に出会えたなら、それは幸せなことだと思わなくちゃ。あの場合、キキにとってはショッキングで、すごくダメージになることかもしれないけど、そうやって呑み下していかなければいけないことも、この世の中にはいっぱいあるわけですから。」患者さんに心を開いてもらえず、素っ気ない態度を取られた時、勝手にショックを受けている自分がいますが、なるほど自分も心のどこかで当然感謝されるものだと思い込んでいたんだな、と気付かされました。このエピソードを聞いてから仕事に対する考えが自分の中で少し変わった気がします。

みんな大好きジブリ飯！

ジブリといえば、ジブリ飯。目玉焼きが載ったラピュタパン、ルパンのミートボールスパゲッティ、ハウルのベーコンエッグ、もののけ姫のジコ坊が作るお粥、ポニョのインスタントラーメン、風立ちぬのサバの味噌煮……。ばあちゃんの畑で取れたばかりの、味も何もついていないきゅうりでさえ、メイやサツキがかぶりついているのを見ると美味しそうに見えます。小さい頃、あのシーンに憧れてキンキンに冷やしたきゅうりを丸かじりしてみましたが、やはりただのきゅうりでした。そりゃそうだ。サツキが作るお弁当もとても美味しそうに見えますが、よく見ると中身は白ごはんと桜でんぶと小魚と豆だけ。時代背景もあるのですが、質素です（笑）。大した料理じゃなくてもなぜかジブリのご飯は美味しそうに見えますよね。ジブリ飯はどうしてあんなに美味しそうなのか。宮崎駿監督はさぞグルメな生活をしているのだらうと思い

きや、ジブリのプロデューサーの鈴木敏夫さん曰く、宮崎駿監督は25年間ご飯ぎゅうぎゅう詰めに卵焼きや沢庵やソーセージがちょっとうたっただけの弁当（愛妻弁当）を昼・夜半分に分けて食べ続けているのだそうです。サツキのお弁当じゃないけどこれまた質素！（笑）宮崎さんがおいしいものを食べるのは1年に1回、誰かに誘われた食事会の時くらいで、滅多に食べないごちそうを目の前に、「これは一体なんですか？」と聞きまくり、「うまい！」を連発するんだそう。つまり、宮崎さんはグルメだから美味しそうなジブリ飯を描けるのではなく、たまに美味しいものを食べるからこそ、その食事をしっかり味わい、感動し、あのジブリ飯を描けるのです。自分にはとても真似できませんが、食事のありがたさを忘れない宮崎さんの姿勢がとても素敵だと感じました。

トトロ制作の裏側

トトロやラピュタが好きな方にぜひお勧めしたい本があります。元スタジオジブリ制作デスクの木原浩勝さんが書いた『ふたりのトトロ-宮崎駿と『となりのトトロ』の時代-』『もう一つの「バルス」-宮崎駿と『天空の城ラピュタ』の時代-』です。締め切りに追われ切羽詰まる制作現場、細かい制作過程、ジブリスタッフの愉快的やりとり、映画にはなかった幻のカット、キャラクターの裏設定など盛り沢山で、これを見た後に映画を見るとまた違った視点で楽しめるのです。今回は『ふたりのトトロ』で書かれていた私の好きなエピソードを紹介します。

『となりのトトロ』は田舎へ引っ越してきた、小学生のサツキと妹のメイが、他の人には見えない「トトロ」「ネコバス」「まっくろくろすけ」といった不思議な生き物たちに出会い様々な体験をするお話です。バス停で雨

に濡れたトトロに傘を貸してあげたり、コマに乗って空を飛んだりといったファンタジックなシーンはもちろん、昭和の日本の田舎の自然あふれる暮らしもどこか懐かしくて魅力的です。そんな平和でワクワクする日常から、お母さんの入院する病院からの電報で物語は一転します。連絡の内容はお母さんの容態が悪化したというものでした。お母さんが心配でたまらずぐずるメイに、いつもは気丈に振る舞うサツキも押さえつけていた気持ちが爆発してしまいます。外に飛び出したメイをサツキが必死の思いで探すものの見つかりません。やがて陽は西に傾き始め、池に小さな女の子のサンダルが浮いているとの知らせがサツキに入ります。サツキに“自分の責任だ”と思い込ませ、サツキの心を追い詰めるという構成で、物語に必要な緊張のシーンを作り出しているのですが、その制作途中、宮崎さんのペンを動かす手が止まります。「サツキを追い詰めすぎですか？」「これ以上進めるのは辛いです」と制作デスクの木原さんに訴えました。宮崎さんは、走り続けてボロボロになっているサツキの姿に自分でも耐えられなくなったそうです。また、見ている子供たちがボロボロのサツキを見て、もう見たくない！と感じてしまうのではないかという不安もありました。そこで悩みに悩んだ末出した結末がネコバスの“めい”の表示でした。これはもうすぐメイに会えるというネタバレであり、この絵コンテを作り上げた宮崎さんは「ここまで追い詰めたんですから、どうなるんだろう？じゃなくて、一気にワーツと子供たちが「会えるんだ！メイは無事なんだ！」と喜ぶのがいいんです。」ととても笑顔で話したそうです。アニメは子供たちのためのもの、と考えている宮崎さんの、“子供たちが楽しめる映画”作りへの思いと、キャラクターへの愛情が垣間見えるほっこりエピソードが

お気に入りです。

映画とちょっと違う、原作

お気に入りのジブリ映画がある方は、ぜひ原作も読んでみてください。宮崎駿監督自身が原作を書いているもの、他の作家が書いた作品を映画化したものなど様々ですが、原作と映画のギャップがまた面白いのです。

例えば、『ハウルの動く城』の原作は、ダイアナ・ウィン・ジョーンズというイギリスの作家の『ハウルの動く城～魔法使いハウルと火の悪魔～』という作品なのですが、そこで描かれているハウルは映画よりナルシストで浮気性、ソフィーは卑屈で嫉妬深く（私の勝手な解釈ですが）、映画とは違った面白さがあります。

『風の谷のナウシカ』は元々宮崎駿監督が『アニメージュ』というアニメ情報誌で連載していたSF・ファンタジー漫画です。「火の7日間」と呼ばれる戦争で文明社会が滅んでから1000年後、汚染された大地には猛毒の瘴気を放つ菌類の森「腐海」が広がり、腐海を守る「蟲」と呼ばれる生物が生息していました。マスクなしでは生きられない世界で、大国同士の争いに巻き込まれた小国“風の谷”の姫・ナウシカが、世界を救うために奔走するというストーリーです。映画を見たことがあるという方は多いと思いますが、実は、映画の内容は原作7冊のうちの1冊半分しかありません。原作は、2つの強国の戦争からはじまり、物語が進むにつれ、単なる人間同士の争いにとどまらず、世界の成り立ちを巡る抗争にまで発展し、腐海の森が生まれた訳、人類や蟲の本当の正体、などが徐々に明らかになっていきます。正直、初めて原作を読んだときはほとんど意味がわからず、何度も読み返してやっと半分くらい理解できたかな？という程度ですが、環境破壊問題、宗教、人種

差別など、考えさせられるものがたくさんあります。映画を見て満足した方も、原作はまた別の作品として楽しめると思いますよ。

最後に

いかがでしたか。自分の拙い文章ではなかなかジブリの魅力を伝えきれなかったかもしれませんが、もし少しでも興味を持って頂けたなら、ぜひ映画をご覧になってみてください。一度もジブリ作品を見たことがない方はもちろんですが、小さい頃見てあまりハマらなかった方も、今見ると新鮮な気持ちで楽しめるかもしれません。

宮崎駿監督も高齢になり、次の作品で引退することを決めました。そんな中、今後ジブリがこういった作品作りをしていくのかはわかりませんが、これからも私にとってジブリ作品は絶えず学びと気づきを与えてくれる、人生の教科書であり続けると思います。まだまだこれからも私の楽しいオタ活は続いていくのです！

次号は、県立大島病院 徳田弘幸先生のご執筆です。
(編集委員会)